

# 源氏物語と藤原俊成の歌論

峯村文人

## 一

風巻景次郎先生は、「新古今時代」所収の「新古今集風體論」の中で、「新古今和歌集」の風體における自然觀照と人生觀照との二つの問題を取り扱はれ、前者の典型を「枕草子」に、後者の典型を「源氏物語」に見られて、新古今的な特色といはれる繪畫的感覺的なものは「枕草子」あたりから和歌の流れに絲を引いて來てゐるので特に新古今的な特色といふべきものではないが、それに對して、人生觀照に見られる物語的な抒情性こそは「繪畫的」といつた風に、枕草紙や金葉詞花このかた傳來といふのでない事はもとよりとして、千載集ですらない様な、眞に新古今集にはじめて見られる様な「最も新古今的なものである」とせられ、「俊成卿が千載集に古今の正調を復活させ、源氏物語の味読を奨め、新古今集がその傾向を受けついたのである」とすれば、新古今集に於ける感覺的なものと情趣的なものと

は自づから別箇の來歴を持つて居る事が分るであらう。」と述べて、俊成を間に置いた「新古今和歌集」の抒情性と「源氏物語」の情趣との深い關係を指摘せられた。「新古今和歌集」の風體を正しく把握するためには、たしかに、この關係の嚴密な考察が要求せられるであらう。しかし、それは、俊成の世界が「源氏物語」の世界といかに關係してゐたかをあきらかにするといふ手續を経ないでは、目的が正しくは達せられ難い事である。それだけでなく、この手續は新古今時代以後における中世の和歌・連歌の詩境を理解する上からも甚だ重要であるといはなければならぬであらう。

昭和二十一年五月號の「國語と國文學」に「平安朝に於ける物語と和歌との相互關係に就いて」といふ石川徹氏の御論考が掲載せられてゐるが、その中に次のやうな推論が提示せられてゐる。

和歌史を主として眺めた場合、あの新古今時代の定家等の

物語取りの作歌態度がいつ頃から始まつたかといふ事が残された疑問であるが、後拾遺、金葉、詞花、千載と、本歌取りはあつても殆ど物語取りはなく、伊勢物語から取つてゐるやうに見えるものも、多く古今集から取つてゐるのであつて、確實に物語の趣を取つたとすべきは、新古今の出現を待たねばならぬのである。これは何故であらうか。一つには物語が特に盛になつて、和歌の領域に侵入したと見る観方であるが、これは最も素樸なあまりに觀念的な考へ方であらう。第二には、俊成が特に源氏物語を推重した爲に、今まではかなき假作物語であつた所の小説の文藝界に占める地位が高くなつて、本歌取りとして古今あたりの歌を尊崇援用すると同じやうな態度で物語、特に源氏物語に接したとする観方で、これはかなり眞に近いであらう。併し、なほ、千載集や長秋詠藻中に物語取りの歌が殆ど無いのに、新古今や拾遺愚草になると急に増えるといふ事の疑問に答へ得ない。

石川氏は、このやうに述べられた上で、この疑問の答として、次のやうな推論に進んでゐられる。

金葉集の連歌部を見ると判るやうに、まだこの頃の連歌は短連歌であつて、素朴な機智の應酬に過ぎなかつたのが、後鳥羽上皇の頃に至つて盛に連歌の催ほしがあつたばかりでなく、<sup>メサリ</sup>鉤連歌、即ち、長連歌が制作されるやうになり、かくて長連歌の性質上、和漢の故事史實傳説がその素材となつて來ると同時に物語も亦、その好き素材の一つとなつたと考へられ

るが、その連歌創作の態度が和歌創作の場合にも波及して來て、あの定家等の物語取りの和歌を生み出すに至つたと觀るのが、最も眞を掴み得てゐるであらう。

右の論は物語取の歌に重點が置かれて立てられた推論であるが、要點をもう少し單純化して見ると、石川氏は、先づ、新古今時代の定家等に見られる物語取の歌の傾向が確實にあらはれるに到つたのは「新古今和歌集」からであると斷ぜられ、次いで、その理由と考へ得られるものの中では、かなり眞に近いと見られるものに俊成の「源氏物語」推重といふ事があるけれども、俊成の撰に成つた「千載和歌集」や俊成の家集である「長秋詠藻」の中には物語取の歌と見るべきものが殆ど無いのであるから、俊成の態度が物語取の歌の傾向を導いたといふ風には見がたいとせられた。そして、物語取の歌の傾向は連歌の發達と大いに關係があり、特に、和漢の故事史實傳説が素材となつて來た長連歌の創作態度から影響せられたと見るのが最もよく眞を把握し得てゐるであらうと推論せられたのである。

もとより制作の契機といふものは單純なものではないから、歴史的に眺める場合には、物語取の歌がさかんなつたといふ事のごとくに連歌の傾向がいくばくかの影響を與へてゐるといふやうな事も考へ得られるであらう。しかし、俊成の世界を詳細に探つて見ると、物語取の歌の由來するところは、どうしても俊成の世界にあると認めないわけに行かなくなつて來る。何よりも、石川氏の推論の大きい鍵となつてゐる「千載集や長秋

詠藻中に物語取りの歌が殆ど無い」といふ點について見ると、實は、俊成は兩集の中に物語取といふべき歌のすぐれたものを幾首も遺してゐるのである。といふ事は、また、それが、單に物語取の歌の問題であるだけにとどまらず、「源氏物語」を中心とした平安時代の物語の世界が俊成の世界にいかにも深く豊かに滲透してゐたかといふ問題にも連なつてゐるわけである。

今、ここには、物語取の作品の實例について精しく述べてゐる餘裕はないが、次にその二三を例示して見よう。

夕されば野邊の秋風身に沁みて鶉鳴くなり深草の里

五月雨は焼く藻の煙うちしめり潮垂れまさる須磨の浦人

須磨の關有明の空に鳴く千鳥かたぶく月はなれも悲しや

右の歌はいづれも「長秋詠藻」の中にあつて「千載和歌集」

にも撰入せられてゐるものであるが、第一首目の歌は、「伊勢物語」にある物語、

昔、男ありけり。深草に住みける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かかる歌を詠みけり。

年を経て住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなり

なむ

女、かへし

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君はこざ

らむ

と詠めりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。

に據つたものであり、第二首目の歌は、「源氏物語」の「須磨」

の卷に、

やうやう事しづまり行くに、長雨の頃になりて、京の事ども思しやらるるに、戀しき人多く、女君の思したりし様、春宮の御事、若君の何心もなく紛れ給ひしなどをはじめ、ここかしこ思ひやり聞え給ふ。京へ人出だしたて給ふ。二條院へ奉り給ふと、入道の宮のとは、書きもやり給はずくらされ給へり。宮には、

松島の蟹の苦屋もいかならむ須磨の浦人潮垂るるころ

いつと侍らぬ中にも、きしかた行くさきかきくらし、汀まさりてなむ。

とあるところに據つたものであり、第三首目は、同じく「源氏物語」の「須磨」の卷に、

月いとあかうさし入りて、はかなき旅のおまし所は、奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入り方の月すぐく見ゆるに、「ただこれ西に行くなり」と、ひとりごち給ひて、

いづ方の雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし

とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

とあるところに據つたものであつて、これらはあきらかに物語

取といふべきものなのである。特に、第一首目の歌のごときは、

俊成の作品中の代表的なものとしてよく知られてゐるものであるが、慈鎮和尚自歌合の判詞の中で、作者である俊成が、みづ

から「崇徳院の御時の百首の中に侍り。これ又ことなることな  
く侍り。ただ伊勢物語に、深草のさとの女のうづらとなりてと  
いへることを、はじめてよみて侍りしを、かの院もよろしき御  
けしき侍りしばかりに、註し申して侍りしを云々」崇徳院の御  
時の百首と  
いふのは久安百  
首の事である。と述べてゐるところから想像すると、「伊勢物語」  
に據つた作品として、俊成自身においてもおろそかにしがたい  
歌であつたらしいのである。

一體、俊成は、「源氏物語」の研究家として、重要な位置を  
占むべき人であつたやうである。吉澤義則博士「國  
語國文の研究」。前田家本「  
原中最秘鈔」の聖覺の奥書には、

抑光源氏物語者、祖父大監物光行久携此道、已究奥區。就中  
於水原鈔者、後京極攝政家・久我太政大臣・後徳大寺左大臣  
家・五條三品禪門等同悉被合力談申也。

と記されてゐるのであつて、「源氏物語」の註釋書のはじめで  
あつたといはれる「水原鈔」に關係した人物の中に、俊成も亦  
數へられるのである。しかも、「原中最秘鈔」の記すところに  
よると、俊成の「源氏物語」研究の深さは、當時の同じ物語の  
研究者をして、「三品和才勝すべたる中に、此物語の奥義をさへき  
はめられ侍りける、ありがたき事なり。」とまで讚歎せしめる  
ものがあつたのである。さういふ俊成が、みづから制作に携は  
つた和歌の世界において、「源氏物語」の世界から学び取つて  
ゐたところの甚だ深いものがあつた事も、當然であつたといひ  
得る。しかし、それにしても、俊成は「源氏物語」から何をい

かに学び取つてゐたのであらうか。具體的に指摘するとするな  
らば、「源氏物語」的なものが俊成の世界のいかなる點に見い  
だし得られるといふ事になるのであらうか。この問題に關して  
は、すでに、能勢朝次博士や窪田空穂氏にもすぐれた御論考が  
あつて、示唆せられたところが大きいが、私も、さういふ先覺  
のあとを追つて、少しく愚考を試みたいと思ふ。

## 二

「源氏物語」を読んでゆくと、「心深し」「心ばへ深し」「志  
深し」「本意深し」「心寄せ深し」「心様も物深し」「深き心」  
「深き心ばへ」「深き志」「深き本意」「深き心用ひ」「深き  
用意」「深く思しとれる御道心」「深く頼み申す心」といふや  
うな「心深し」の同類と見るべき語がしきりにあらはれる。單  
にかういふ語があらはれるといふ點だけからいふならば、當時  
の物語類においてはさ程珍しい事でもないが、しかし、用ひ方  
の深さとか鋭さとかいふ方面や、物語を貫く精神美の上におい  
て擔つてゐる重要性とかいふ方面に留意して見ると、輕率に見  
過ぐす事の出来ない語である事に氣附かしめられるのである。  
では、「心深し」の類の語は、「源氏物語」において、いか  
なる意味内容を持つものとして用ひられてゐるのであらうか。  
かういふ語はもとより極めて微妙な意味をあらはすものではあ  
つて、内容を明確に限定し切る事のむづかしいのが當然である  
けれども、今、「源氏物語」の中から拾ひあげ得た百數十例を

整理して見ると、凡そ次に述べるやうな事にならうかと思ふ。

第一。「心深し」といふやうな場合の「心」において最も普通に通に考へる事の出来るものは、自我の状態としての「感情」とか「情」とかいふ語を以て代へる事の出来るものであらう。「源氏物語」においてもかういふ「心」の「深さ」を意味したものを第一に擧げる事が出来る。「あはれに心深く思ひ歎きて」(葵)「あはれに心深き契りをし給ひしに」(蓬生)「いと孝の心深くあはれなりと見給ふ」(常夏)「さるおほどかなる物の音がらに、深き人の心染めて弾き傳へたる」(横笛)「花惜しみ給ふ心ばへども深からず」(幻)等のごときである。この種のものでは、感情の流れとか感情の氣分的連續とかをいふ「情趣」の深い事を意味すると考へられるものが甚だ多い。ここに「源氏物語」の美の根本も暗示せられてゐるのである。第二。「心深し」の類の語は、又、「意志」もしくは「決意」としての「心」の深い事を意味した。「官仕の本意深くものしたりし喜び」(桐壺)「高き志深くて、鰥にて過しつづ」(若菜上)「名残なき御聖心の深くなり行くにつけても」(幻)「中將の君の道心深げに物し給ふなど」(橋姫)等のやうに「本意」「志」「聖心」「道心」をもつてしたもの、「佛のおはすなる處の有様、遠からず思ひ遣られて、異なる深き心も無き人さへ罪を失ひつべし。」(御法)のやうに單に「心」を以てしたものとがある。ここには、情的要素もあるけれども、意志的要素がいちじるしく強いと見るべきである。第三。「注意」「心用ひ」等の心が深い事を「心深

し」の類の語を以ていひあらはしてゐる場合も見いだされる。

「深き御心用ひや」(胡蝶)「用意深く恥しげなるけはひ」(宿木)等のやうにいひあらはしてゐる事が多いが、「心深くたばかり給ひけむ事を知る人無かりければ」(賢木)のごときはその典型的な用例である。この第三の用例は智的要素のいちじるしく強いものといへる。第一・第二の用例に比すれば、この種の用例は甚だ少いやうに思はれる。第四。「心深し」の類の語は、心をうつし出してゐる世界すなはち「さま」「けしき」「けはひ」における情調の世界の深さを意味する語でもあつた。「源氏物語」の作者の鋭い感覺は、人物の心理の描寫を、そのまことに鋭い筆致によつて立派に成し遂げてゐたと同時に、人物における「さま」「けしき」「けはひ」のやうな全體的なものから受ける感じをも、亦、深く捉へてゐたのである。「母御息所いと重々しく心深き様に物し侍りしを」(滯標)「單衣の御衣を引きくくみて、猛き事とは音を泣き給ふ様の、心深くいとほしければ」(夕霧)等のごときは、心深い「さま」であり、「とざまかうざまに忘れむ方なき由を歎き給ふけしきのいと心深げなるも、いとほしうて」(宿木)のごときは心深い「けしき」であり、「御物語などせさせ給ふけはひなどの、いとあらまほしう、のどやかに心深きを見奉る人々、若きは心に染めてめでたしと思ひ奉る」(總角)「この人はた、いとけはひ殊に、心深く、なまめかしき様して」(浮舟)等のごときは心深い「けはひ」である。第一の心深さと共に、この種の心深さがまこと

によく「源氏物語」の美の性格を示してあるものと考へられるのであつて、注目すべき用例である。第五。詩歌・言語・建物等から感得せられる深さも「心深し」の類の語を以ていひあらはしてゐる。「その夜の歌ども、唐のも大和のも、心ばへ深う面白くのみなむ。」(鈴蟲)「宮の御前には、あはれに心深き言の葉を盡して恨み聞え」(夕霧)「いとめでたき御住ひの心深きを、なほふさはしからず見奉る」(東屋)等のごときがそれである。この第五の用例は第四の用例の性格と深く關聯してゐるものと考へられるが、特に、詩歌や言語の心深さといふ事にも意識の向けられてゐたといふ事實は、歌論において發展せしめられ深化せしめられた「心」と「詞」との相關の問題にも連るわけで、看過しがたいものがある。歌論書と歌合判詞とを通じて、和歌の表現に關して「心深し」といふやうな語を用ひ、かつ、心深い事に甚だ高い價値を認め、それに積極的な關心を示したものは、「源氏物語」の成立した時代のものだけでなく、それ以後のものについて見ても、俊成の出現を見るまでは甚だ稀なのであつて、紫式部とほぼ時代を同じくした藤原公任が心の深い事を第一義的なものとして重要視してゐた事を除いては極く少しく注意せられたに過ぎない。したがつて、紫式部が、歌の心ばへの深さといふ點についてその面白さを述べてゐる事、「心」と「ことば」との深い關係から生れた「あはれに心深き」感について述べてゐる事のごときは、たしかに注目すべきものがある。

以上で、「源氏物語」における「心深し」及びそれと同類の語の意味内容は大體の吟味を下し得たかと思ふ。そして、以上のやうに吟味して來ると、「源氏物語」においては、「心の深い事」が非常に重要な事であり、それが美の理想と非常に深く結びついてゐるといふやうに考へられて來るであらう。次には、さういふ問題について、少しく立ち入つて考察を進めて見る事としよう。

「紫式部が源氏物語創作に於て抱いてゐた文學的理念は、光源氏と光源氏をめぐる幾多の人々の生活に於て體驗された價値意識、それを物の哀れといふ精神的方向に於て觀照しようとしたものに外ならない。」昭和十一年十月號國語・國文掲載、木枝増一氏の論考「構想より觀たる源氏物語の文學性」「源氏物語」を貫くさういふ「ものあはれ」の精神を「源氏物語」の具體的な姿に即して捉へようとする、まづ第一に心の深さといふ事につき當る。

「薄雲」の卷に、「淺ましうも疎ませ給ひぬるかな。眞に心深き人は、かくこそあらざなれ。」とある。これは、光源氏の言葉である。光源氏をしてこのやうに言はしめたのは、作者の胸中にゑがかれてゐた理想的な人物の必ず具有すべき心的條件に心の深さがあつたといふ事に外ならないであらう。「須磨」の卷には、「互に心深きどちの御物語はた、よろづのあはれまさりけむかし。」ともある。心の深い人々は「ものあはれ」の世界に深くひたる事の出來る人々なのであつた。又、「總角」の卷に、「人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ給ふけ

はひなどの、いとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心に染めてめでたしと思ひ奉る。」とあるところのごときにも注目せしめられる。これは、薫の事を述べたところであるが、薫の物語する「けはひ」は、のどやかで心深く、まことに理想的であつたといふのである。深い心のうかがはれる「さま」「げしき」「けはひ」の世界、すなはち、深い心が姿においてほのかな雰囲気として感ぜられる美の世界が理想的な世界であつたわけである。しかし、このやうな心の深さが眞にすぐれた美となつて發現せしめられた姿の典型的なものを求めるとすると、次のやうな場合がそれにふさはしいとすべきであらうか。「東屋」の巻に、「女は母君の思ひ給はむ事など、いと歎かしけれど、艶なる様に心深くあはれに語らひ給ふに、思ひ慰めて下りぬ。」とあるのがそれである。「艶なる様に心深くあはれに語らひ給ふ」といふところは、浮舟に語る薫の様態を描寫したところである。作者は、薫において、「心深さ」と「艶」と「あはれ」とが渾然として融合してゐる美を描き、そこに理想的な姿を具體化して見せたものに外ならないのだと思ふ。なほ、このほかに、「この人はた、いとけはひ殊に、心深く、艶かき様して、久しかりつる程の怠りなど宣ふも言多からず。戀し悲しと下り立たねど、常に逢ひ見ぬ戀の苦しさを、様よき程にうち宣へる、いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべき様をしめ給へる人柄なり。」などといふやうな描寫も見られる。これも、薫の様態について物語つてゐる

ところである。

「源氏物語はどの一卷をとつても、そこには情調の全體性がにじみ出て人に迫つて来る。その情調は作中の主人公の抱く感情の展開の不自然さを十分に救つてゐる。その全體性は人生を全圓的に見ようとする式部の觀照態度と相應じて、一卷の特殊性を全篇の普遍性たらしめ、全篇の文學性を人間性の象徴にまで高めてゐるのである。筋や事件としては、短篇の集合でありながら、全篇として情緒の統一性をもつてゐる所以である。」  
前記、木枝増一氏の論考「構想」より觀たる源氏物語の文學性 「源氏物語」全篇を貫くかういふ情調の全體性やかういふ情緒の統一性の中核をなし、全篇の文學性に象徴せられてゐる人間性の世界に秩序を與へてゐるものは心の深さであり、そこに渾然として滲透してゐるものの中で特に際立つてゐる美的要素が艶とあはれとであるといふ事が出来るであらうか。そして、薫のごときは、さういふ世界の中で、理想的かつ典型的な美とその陰翳とを身にあつめながら動かしめられてゐる人物の一人であるといつてよいであらう。いひ換へれば、ほのかにゆらぎ漂ひ豊かな陰翳をつくりつつ流動して行く情調の世界において、その中に滲透しつつ、同時に、「心深さ」と「艶」と「あはれ」との集中的に統一せられた姿こそは「源氏物語」の理想的かつ典型的な美であるに外ならないのだと考へられる。そこでは、先に見たやうに、「心深さ」の「心」も、それぞれ用ひられた位置において、意味内容を異にしたがら、しかも、「源氏物語」全篇の「心」としての統一の中にあ

るのである。「源氏物語」を貫く「もののははれ」といふのは、かういふ世界の上に立つ理念に外ならないわけである。

「玉の小櫛」において、「源氏物語」は「物のははれをしらしむることをむねとかきたるもの」であると断じた本居宣長も、「もののははれ」を感じしめる世界と「心深さ」との關聯に觸れて、「いづれの物語も男女のなからひの事をむねとおほく書きたるは、よゝの歌の集共にも戀の歌の多きと同じことわりにて、人の情のふかくかゝること戀にまさるはなれば也。」「玉のいふやうに述べてゐるが、何よりも、「源氏物語」自體が、「權」の卷に、「大方の空もをかしき程に、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしもののははれ取り返しつゝ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心ばへなども思ひ出で聞えさす。」と述べてゐる事は興味が深い。「過ぎにしもののははれ」が、その折々に「をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心ばへ」に結びついてゐるからである。

### 三

俊成は、「歌の本體には、ただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり」と「古來風體抄」の中に述べ、同様の事を別のところにおいても述べてゐる。「古今和歌集」の世界は、たしかに、平安時代は無論の事、中世をも貫いて和歌美の規範として仰ぎ尊ばれたものであり、俊成も新しい歌境の完成への道に生きるに當つて、何よりも深くその事を覺悟してゐたやうである。しかし、

俊成は、一方において、「源氏物語」を歌人必読の書とし、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」といふ有名な言葉を六百番歌合の判詞の中に遺してゐる。しかも、その俊成を中心として完成せられた新古今時代の歌境を熟視すると、そこには、たしかに、古今的なものの展開や深化に「源氏物語」的なものがいちじるしく深く參與してゐる事を認めないわけに行かないのであつて、俊成において必読の書とせられた「源氏物語」が決して單なる教養の書ではなかつた事が知られる。そして、かういふ點に於いて、俊成の歌論の方面から考察しようとする、どうしても、彼の批評用語である「心深し」といふ語を取り上げなければならなくなるであらう。

私は、かつて、「心深し」といふ語の考察を中心として俊成の歌論についてのささやかな研究を發表した事があり昭和十年十一月號「如月會誌」掲載「その時の考への骨子は現在においてもさ程變つたところがないので、ここでは必要と認められる範圍で要點に觸れて行きたいと思ふが、「源氏物語」における心の深さといふ問題を先のやうに考察して來て俊成の世界と比較して見ると、「源氏物語」における文藝美の世界と俊成のそれとの間には驚くべき近似性を見いだす事が出来る。今、それを簡條的に指摘して行つて見ると、次のやうになるかと思ふ。

第一。「心深し」の類の語は、「源氏物語」においても俊成においても用例が甚だ多く、かつ、その意味するものがいづれにおいても高い價值があると認められてゐる。俊成以前におい

て歌の心の深さの重要である事を特々強調したのは藤原公任であり、彼の著「新撰髓腦」には、一凡そ歌は心深く姿きよげにて心をかしき所あるをすぐれたりといふべし。事多く添へくさりてやと見ゆるがいとわろきなり。一筋にすぐよかになむよむべき。心すがたあひ具する事かたぐば、まづ心をとるべし。

つひに心深からずば姿をいたはるべし。」とある。しかし、公任以外の歌人では、心深い事を歌の第一義的なものとして強調した歌人はゐないのであつて、俊成があらはれるまでは、「心深し」の類の語が歌合の判詞のごときに見えてゐる例も甚だ少いのである。そして、俊成になると、用例が多いばかりでなく、例へば、御裳濯川歌合の十八番において、右の歌「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ澤の秋の夕暮」を「鳴立つ澤といへる、こころ幽玄にすがたおよびがたし。」と評してゐるにもかかはらず、左の歌「大かたの露には何のなりぬらむ袂におくは涙なりけり」を「露には何のといへる詞、あさきに似て心殊にふかし」と評して、この左の歌を勝としてゐるやうに、心の深い歌に對して幽玄な歌よりも高い價値を與へてゐる例さへも見られるのである。俊成においても心深い事は歌の第一義的なものとしていかに重要視せられてゐたかがうかがはれるであらう。

第二。「心深し」の意味内容としては、「源氏物語」において、まづ、感情もしくは情や想念の深さといふ事が取り上げられるが、俊成においても同様である。俊成は、「古來風體抄」

に「上古の歌は、わざとすがたをかざり、詞をみがかむとせざれども、代もあがり人の心もすなほにして、ただ詞にまかせていひいだせれども、心もふかく姿もたかくきこゆるなるべし」と述べてゐるし、御裳濯川歌合の判詞では、西行の歌に「あさきに似て心殊にふかし」「心ふかくして、姿さびたり」「心ふかく姿優なり」といふやうな評を與へて、心の深さのいちじるしいものがある事を認めてゐるし、又、慈鎮和尚自歌合を見ると、その特色において、西行に非常に近いものを持つ慈圓の歌の「柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれながめてけりな恨めしの身や」大比叡、四のごときに對して、「心かぎりなくふかくこそみえ侍れ」番、左といふやうな評を與へてゐる。かういふ事實から導き出し得られる事は、俊成が表現を通して感得せられる深くて切實な感情とか感動とかあるひは想念とかいふもの、總括的にいひ換へれば、深い「まこと」といふものを歌の根源として重要視してゐたといふ事であると思ふ。

第三。「源氏物語」における「心深し」には情趣や情調の深さといふ事が見いだされ、それは「源氏物語」の美の性格をよくあらはすものとして注目せられるが、俊成においても同様の事がいひ得られる。俊成が、六百番歌合において、「曉の涙やせめてたぐふらむ袖におちくる鐘の音かな」曉戀、五の歌を評して、「せめての字實にいと叶ひても聞えねど、袖におちくるなどいへる、心深く聞ゆ。右勝ち侍らむ。」と述べてゐるところや、民部卿家歌合において、「おほかたにあきのね覺の露けく

ばまた誰が袖に有明の月」曉月、三の歌を評して、「秋のね覺の露けくばとおきて、又たが袖にといへる、心殊にふかくも侍る哉。猶右可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>勝。」と述べてゐるところのごときを見ればあきらかであらう。

第四。「源氏物語」における文藝美は、「心深さ」と「艶」と「あはれ」との統一の美において、その理想的な姿を見いだす事が出来るが、俊成においても、さういふ美を幽玄美として具體化するところに最高理想があつたのだといひ得られるであらう。俊成が心深い事をいかに重要視してゐたかは以上に觀て來た通りである。しかも、俊成は、六百番歌合の判詞に「凡そ、歌は優艶ならむ事こそ可<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>庶幾<sub>一</sub>を云々」寄<sub>レ</sub>海戀と強調し、七番。「古來風體抄」には「歌はただよみあげもし詠じもしたるに、なにとなく艶にもあはれにもきこゆる事のあるるべし。」と、彼の理想的な美を述べてゐるのである。

第五。以上のやうに比較して來ると、更に、俊成が慈鎮和尚自歌合において披瀝した「おほかた歌は、かならずしもをかしきよしをいひ、このことわりをいひきらむとせざれども、もとより詠歌といひて、たゞよみあげたるにも、打ち詠じたるにも、なにとなくえんにも幽玄にもきこゆることのあるべし。よき歌になりぬれば、其詞すがたのほかに、景氣のそひたるやうなることあるにや。」といふ和歌理想論のごときも、制約し難い心の深い相が制約せられない漂渺たる體の上にゆらぎひろがる美を説いたものとして、「源氏物語」の情調美に深くつらなる

ものである事を思はないわけに行かなくなつて來るのである。「源氏物語」の情趣美・情調美の世界と俊成のそれとがいに近いものであるかははやあきらかであらう。この事實は、俊成が「源氏物語」の文藝美の核心に肉薄していかに深くかつ豊かに攝取するところがあつたかを充分に語つてゐるものだといつてよいであらう。

俊成の歌道について深い理解を持つてゐられた後鳥羽上皇は、俊成の特色について、

釋阿はやさしくえんに、こころもふかく、あはれなるところもありき。

と評してゐられるが、ここに、「源氏物語」の「東屋」の卷に、薫の様態の美を語つてゐる、

女は、母君の思ひ給はむ事など、いと歎かしけれど、艶なる様に心深くあはれに語らひ給ふに、思ひ慰めて下りぬ。

といふところを想起して見ると興味が深い。今や、かういふ敘述の近似が決して偶然の事ではなかつた事が考へられるのである。

俊成は、「長秋詠藻」の中に、戀せずば人は心も無からましものあはれもこれよりぞ知る

といふ作を遺してゐる。これは、いはば、俊成の「ものあはれ」論である。宣長によつて取り上げられた「ものあはれ」が心の深い事と深く關聯してゐる事は「源氏物語」自體が物語つてゐる事である。「源氏物語」と俊成の世界との相關關係を

以上のやうに觀て來たところよりすれば、俊成のいふ「ものあはれ」も亦宣長の「ものあはれ」と深く相通するものであると考へる事が自然であらう。そこで、宣長の「玉の小櫛」をもう一度見直してみると、その「源氏物語」論の核心の部分に次のやうに述べられてゐる事が注目せられるのである。

此物語は、よの中の物のあはれのかぎりを書きあつめて、よむ人を深く感ぜしめむと作れる物なるに、此戀のすぢならば、人の情のさまざまとこまかなる有さま、物のあはれのすぐれて深きところの味ひは、あらはしがたき故に、殊に此すぢを、むねと多く物して、戀する人の、さまざまにつけて、なすわざ思ふ心の、とりどりにあはれなる趣を、いともこまやかにかきあらはして、ものあはれをつくして見せたり。後の事なれど、俊成、三位の「戀せずば人は心もなからまし物のあはれもこれよりぞしる」とある歌ぞ、物語の本意によくあたれりける。

物語といふものは「ものあはれ」のかぎりを書き集めて讀者の心に深く感ぜしめようとするものであるが、「ものあはれ」の殊に深い味ひといふものは戀愛感情の世界において最もよくあらはし得るのであるから、「源氏物語」は、戀愛の種々相を描く事によつて、「ものあはれ」をつくして見せたのであると説き、俊成が「戀せずば人は心もなからましものあはれもこれよりぞ知る」と詠じた心は、さういふ物語の本意によく當つてゐる、と道破してゐるのである。「源氏物語」の精神

を「ものあはれ」によつて捉へてその核心を衝いた宣長は、俊成の志向したところに對してもよい理解者の一人であつたといふべきである。

#### 四

以上は、「源氏物語」的なものと俊成の世界との近似性といふ方面から、兩者の關係を觀て來たのであるが、次に、俊成自身「源氏物語」をいかに觀てゐたかについて述べて見たい。ここでは、第一に、俊成が「源氏物語」の美の性格をいかなるものとして捉へてゐたか、第二に、「源氏物語」の美から學び取つて、あらたな和歌美を創造する上に、意識的には、いかなる態度をもつて臨むべきであるとしてゐたか、といふ二つの方面から見る事が出来る。

六百番歌合を見ると、藤原良經の作、見し秋を何に残さむ草の原ひとつにかはる野邊のけしきに

(枯野、十三番左、勝)

を、右の方人が「草の原、聞きよらず」と難じたのに對して、俊成は、「左、何に残さむ草の原といへる、艶にこそ侍るめれ。右方人草の原難申之條、尤うたたあるにや。紫式部、歌よみの程よりも、物書く事は殊勝なり。その上、花の宴の卷は殊に艶なるものなり。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり。」と述べてゐる。良經の歌は、「源氏物語」の「花宴」の卷の、朧月夜の歌のあたり、すなはち、

憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや  
思ふ

といふ様、艶になまめきたり。

のあたりの優艶な情趣美が背後に置かれてゐるのである。さて、俊成は、右の評において、「花宴」は殊に艶であるといつてゐる。さうすると、彼は「源氏物語」の美を艶であると観てゐた事になる。彼は、又、紫式部を評して、歌人としてよりも物語の作者として殊勝であると喝破してゐる。彼は「源氏物語」とその作者紫式部とを無批判的に迎へてはゐなかつたのであつて、この批評には、さすがに大歌人であり「源氏物語」の研究者でもあつた俊成の鋭さときびしさとがうかがはれる。

次に、同じ六百番歌合に、藤原家房の作、

次きみだる野分の風の荒ければ安き空無き花のいろいろ

(野分、二十六番右、勝)

について、俊成は、「吹きみだると置ける、源氏の野分の玉かづらなど思ひ出でられて艶なる様には侍るにや。」と評してゐる。「源氏物語」の「野分」の巻に、

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせ給へる事、常の年よりも見所多く、いろくさをつくして、由ある黒木・赤木の籬を結び交ぜつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かと輝きて造り渡せる野邊の色を見るには、又、春の山も忘られて、涼しう面白く、心もあくがるるやうなり。

と、

心もとなく思しつづつ明け暮るるに、この花の色増る氣色どもを御覽するに、野分例の年よりもおどろおどろしく、空の色變りて吹き出づ。

とかあるやうなところを背景として、玉かづらが、吹き亂る風の氣色に女郎花萎れ死ぬべき心地こそすれと詠じてゐる部分などに據つて、六百番歌合の歌も詠ぜられてゐる。そして、俊成はこのやうな情趣美を艶であると見てゐるのである。

又、俊成は、水無瀬殿戀十五首歌合において、後鳥羽上皇の御歌、

君もしながめやすらむ旅衣朝たつ月を空にまがへて

(羈中戀、三十三番左、勝)

に對する評に、「朝たつ月を空にまがへてと侍る心すがた、源氏物語の花のえんの歌など思ひ出でられて、いみじくえんにみえ侍り。」と記してゐる。ここに「花のえんの歌」といふのは、「花宴」の巻にある光源氏の歌、

世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへてを指す。ここでも、俊成は「源氏物語」の艶の美に觸れてゐるのである。

先に、「源氏物語」における情趣美・情調美の重要な性格として「艶」が認め得られた。俊成の理想とした和歌美においても亦「艶」は甚だ重要なものであつた。俊成の求めた最高の歌境は、優艶美の理想的形成にあるとさへいへる。そして、さう

いふ俊成によつて、「源氏物語」から深く感受せられてゐたものも「艶」に外ならなかつたのである。「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり。」といふ言葉は、艶なるものを深く味ふ感受力に缺けてゐる點に對する非難であつたと同時に、艶の美を眞に深く理解し得るために、「源氏物語」は必読すべきものである事を強調したものであるに相違ない。作品鑑賞の淺薄さへの抗議であつたと同時に、彼の理想がいかなる方向の美に傾いてゐたかを暗示した言葉でもあつたといへる。

もつとも、單に「源氏物語」の美に艶なるものを認めるといふ事だけについていへば、それは當時の「源氏物語」を読んだ者の一般に通ずる事であつたといつてよいであらう。「原中最秘鈔」の中の「夢浮橋」の條に、

凡以<sup>ハツキヨイ</sup>白居易之文集<sup>タクラフ</sup>比<sup>タラフ</sup>此紫式部源氏<sup>マラシツタヘ</sup>と古來より申傳たり。詞の優艶更に無<sup>ニ</sup>比類<sup>一</sup>ゆる也。

と記されてゐる。しかし、當時の一般歌人達は、俊成等のやうに、「源氏物語」を深く味読してはゐなかつた。まして、俊成等のやうに艶なるものを深く知るといふやうな事は甚だむつかしい事であつたであらう。後京極自歌合に見られる次の例のごときも、かういふ點に關する消息をまことによく物語つてゐると思ふ。

後京極自歌合、七十三番。

左 別戀

忘れじの契りをたのむ別かなそら行く月の末をかぞへて

右 舟中戀

浮舟のたよりもしらぬ浪路にもみし面影のたぬ日ぞなき

此番、勝劣分ちがたく見え侍り。大方は申すも恐れ侍れども、歌はよそへ、其よりえんなる所の名なんと侍らねど、左の、忘れじのといひ、右は、たよりもしらぬ浪路にもなんどいへる姿詞づかひ、何となくえんにも優にもきこえ侍るを、世の人は心えず侍るなるべし。いづかたも、おとると申しがたし。持とすべし。

「忘れじの」といふ歌には直接に據りどころとなつたものがあるかどうか今あきらかにする事が出来ない。「浮舟の」といふ歌は、「狭衣物語」<sup>卷第二の、</sup>うき船のたよりに行かむわたつ海のそこと教へよ跡のしら

なみ

あはれ。

とある狭衣の大将の歌に據つたものと見てよいであらう。右の二首のごときが平安時代の物語の情趣に通じてゐるといふやうな事に對する一通りの判断だけであるならば、當時の一般歌人達にとつては、さ程むつかしい事ではなかつたであらうが、最も大切な事は、和歌美として形成せられてかぎりない芳香を發してゐる「艶」の微妙さに眞に深く觸れるといふ事であつて、さういふ點になると、平凡な鑑賞眼の持ち主ではほとんど不可能の事なのであつた。俊成が「左の、忘れじのといひ、右は、たよりもしらぬ浪路にもなんどいへる姿詞づかひ、何となくえ

んにも優にもきこえ侍るを、世の人は心えず侍るなるべし。」  
といったのは、かういふ高い「艶」の美を解し得る歌人の乏し  
かつた事に對する深い歎息であつたといはなければならぬ。  
そして、俊成が眞に深く求めた美は、遂に、「艶」即「幽玄」  
といふやうな雅醇かつ玄妙な美に外ならなかつたのであり、そ  
こにあらたな創造があつたわけである。「忘れじ」の歌と「浮  
舟」の歌との二首は、いづれも、定家なども注目したもの  
やうで、「新勅撰和歌集」には二首共に卷第十三戀歌に入集し  
てゐるのである。

次に、俊成が、「源氏物語」の世界の中に直接の據りどころ  
を求めて和歌美を形成するに當つてはいかなる態度をとるべき  
ものとしてゐたかについて觀て行かなければならない。

六百番歌合を見ると、藤原家房の作、

折りてこそ見るべかりけれ夕露にひもとく花の光ありとは

(夕顔、十三番右、勝)

に對して、左の方人が、「右歌、偏に源氏の物語ばかりを思へ  
るため、歌合の證事如何。」と難じたのを受け、俊成は、「右、  
偏に源氏物語には侍れど、又、歌様優ならざるにはあらざるに  
や。」と評してゐる。「折りてこそ」の歌は、「源氏物語」の

「夕顔」の卷に、光源氏の歌、

寄りてこそそれかとも見め黄昏にほのぼの見つる花の夕顔

夕顔の歌、

光ありと見し夕顔の上露は黄昏時のそら目なりけり

とあるのにもとづいて詠せられたものであつた。俊成も、左の  
方人の意見に同意して、ひとへに「源氏物語」に據つてゐる點  
の非は認めてゐたやうである。しかし、「折りてこそ」の歌に  
は、和歌美としての「優」の美が形成せられてゐるのであつて、  
物語の世界を餘情として感ぜしめるやうな、なだらかで清らか  
な美が見られもするのである。さういふ長所を、俊成は「歌様  
優ならざるにはあらざるにや」と評して、勝を許したものと考  
へられる。

同じく、六百番歌合に、藤原隆信の作、

たそがれにまがひて咲ける花の名を遠方人や問はば答へむ

(夕顔、十八番右、持)

を評して、俊成は、「今の歌は、偏に源氏を思ひて詠める、然  
るべからず、源氏のため悪しくなりぬべし。」と述べてゐる。

この「たそがれに」の歌は、「源氏物語」の「夕顔」の卷に、  
きりかけだつ物に、いと青やかなる葛の、心地よげにはひか  
かれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉開けたる。「遠  
方人に物申す」とひとりごち給ふを、御隨身ついゐて、「か  
の白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、か  
うあやしき垣根になむ咲き侍りける。」と申す。

とあるところを中心とし、先の「折りてこそ」の歌の場合にも  
引用した「寄りてこそそれかとも見め黄昏にほのぼの見つる花  
の夕顔」の歌などを思ひ浮べて作られたものである。ところで、  
この歌のごときになると、全く物語に據り切つて、何ら新しい

独自の世界が形成せられてはゐないのである。「源氏物語」をひとへに思つてゐる作でありながら、「源氏物語」の情趣も感ぜられないし、この歌独自の餘情は無論無いのである。俊成は、かういふ作には、極めて厳しい態度をもつて臨んだのである。かういふ作のやうにひとへに「源氏物語」を思つて作るといふ事は「源氏物語」のためにも悪しくなるであらう、といふ。これは、「源氏物語」を尊重した態度であると同時に、和歌独自の價値を思ひ、和歌自體の獨創性を尊重した極めて慎重な態度のあらはれに外ならないのだと思ふ。かういふ態度は、俊成の歌人としての偉大さと指導者としての識見の高さを語つて餘りあるものといつてよい。

## 五

俊成の求めた和歌美の世界が「源氏物語」における文藝理念やその具體化せられた美の世界といかに深い關係にあつたかは、以上の考察によつて、凡そあきらかにし得たかと思ふ。しかし、俊成の求めたものは、單に、「源氏物語」の再現といふやうな事ではなかつた。俊成の求めたものは、「源氏物語」を形成してゐる言葉の一つ一つに籠る微妙な味ひにも深く分け入つて、その情趣美・情調美の醍醐味の中にいきづくと共に、それから出でて、和歌独自の高い文藝美をあらたに創造する事によつて、「源氏物語」の美にあらたな生命を興へて行く事にあつたのである。ここに、傳統の中に眞に生きようとする者のま

ことにきびしい姿を見いだす事が出来る。

俊成が和歌自體の傳統を正面から正しく承け繼いで生きようとした態度は、「古來風體抄」の「歌の本體には、ただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり。」といふ言葉が最も端的に語つてゐる。彼は、和歌自體の歴史に学び、先進歌人の訓へるところに學んで攝取すべきものは餘すところなく攝取した。しかし、彼は、さういふ道に立ちつつ、平安時代における文藝の最高峯たる「源氏物語」の美の核心に肉薄して、周到にみづからの進むべき道を見いだしていつたのである。

ところで、「源氏物語」が、このやうな關係のし方で、俊成の詩心に結びつくに到つた事の深い理由はどこにあつたのであらうか。さういふ問題については、別にあらたに論究せられなければならぬであらう。しかし、ここで極く大まかにいひ得る事は、それは「源氏物語」に宿されてゐる詩心の高さであつたといふ事なのだと思ふ。島津久基博士は「紫式部」の中に、「源氏物語」の世界について、

人の世の美しい姿を、そして醜い姿をも、又喜びや愉しさと共に苦しきも惱みも悲しみも、餘さず、そしてそれを自身の心境を通して、詩心を通して、精神の崇さを通して、物語らうとしてゐるのである。理想の男性光源氏、理想の女性紫上に、當時にあつての希求せられる最高の容相を具現し、その上それが偶像に近いものに見えながら、全然の偶像化になり了つてはゐないところに、作者の並々ならぬ手腕が認めら

れる。又源氏物語全體が抒情詩的な香氣に包まれて、人間苦も悲運も醜惡も、すべて作者の愛と同情の手に淨められ美化され、しかも尙且峻嚴な批判の筆は、目に見えぬ鋭さを以て迫るところに、抒情小説でもあり、客觀小説でもあり、又詩でもあり物語でもあり、そして人生批評でもある源氏物語が現前するのである。云々

と述べて、「源氏物語」の持つ抒情詩的な香氣と、それを生ぜしめた作者の高い詩心とに觸れてゐられる。俊成は、「紫式部、歌よみの程よりも、物書く事は殊勝なり。」と、六百番歌合の判詞の中で評してゐるが、實は、紫式部の、歌ならぬ物語の、かういふ詩心を鋭く感じ取り、それにはげしく動かされてゐただといつてよいのであらう。

吉澤義則博士は、昭和十八年六月號の雑誌「帚木」

新古今に  
特輯號に

「艶」についての御検討を試みられ、更に昭和二十一年四月號の雑誌「世紀」に「なまめかし」「みやび」「すき」「風流」の諸語と共に「艶」についてもあらたな御検討を加へてゐられる。「艶」についての二つの御検討の結論は、後者の方で訂正せられてゐるところがあるので、同一ではないが、兩者において吉澤博士の検討せられたところにしたがへば、平安時代の特に「源氏物語」のごときにおける「艶」は凡そ次のやうなものであつた。

(一)「えん」は「情趣にそゝられる心の姿」「情感に動く

心のほのめき」の表現であり、「うきやかな氣持に、人の心をさそふ風情」の表現である。

(二)「なまめかし」の美と「みやび」と「えん」とは多分に共通性を持つてゐるが、「なまめかし」がこの世の肉感美を拂拭し去つた精神美で、「らうたさ」「たをやかさ」「さび・瀟洒」「清げ」を「上品さ」すなはち「あて」で締めくくつた美といふべきものであり、「うはべのなさけ」ではなくて、腹からの「みやび」がおのづから姿態に現はれた美を本質としたものであるのに對して、「えん」には、ややもすれば「あだなるさま」になる危険があり、「すき」に通ずる性格がある。

(三)うきやかな花やぐ寮圍氣は「みやびわざ」のすべてに要求せられてゐたのであるが、かういふ美としての「えん」の見られる戀の世界の代表的なものは、例へば、薰大將の字治大姫君に對する戀のやうなものである。

(四)「えん」は艶の字音をそのままに國語化した輸入語と考へられ、詩学の術語であつたところから、歌学に繼承せられ、歌道を通じて、平安時代の話語にまで弘まつたものと考へられるが、歌学では、歌言葉の言外に、ほのぼのと感ぜられる寮圍氣をいつたもので、つまり言外の餘情であり、かういふ意味から、一般に、うきやかな感じ、また思はせぶりな景氣を示すに用ひられてゐる。

私の論考は「心深し」の考察から入つて「源氏物語」と俊成

の歌論との關係を觀たものであり、「艶」の意味内容のごときについて特別に検討するところはなかつたが、右に要約させていただいた吉澤博士の御高説は、甚だありがたい参考になる。勿論、俊成等の時代には、「源氏物語」の「艶」の意味内容のごときが右のやうに嚴格に把握せられてゐたわけではなく、彼等の鋭い感受力によつて直覺的に感じ取られてゐたものであつて、意味内容の輪郭はもつと大まかなものであらうが、しかし、俊成等の用ひた「艶」は、もはや、本來の詩学から歌学への繼承のままの素朴的な「艶」ではなく、あきらかに平安時代の話語——特に「源氏物語」における「艶」をふまへての「艶」であつて、「源氏物語」の「艶」を疎外しては決して正しい理解が得られない性質のものなのである。かういふ問題については、更に多くの筆を費さなければならぬが、今は紙數の餘裕も無いので、吉澤博士の御高説を紹介し、合はせて私の寸言を添へて補ひとしたい。